

Title	特集I「社会学の方法とリアリティ」に寄せて
Sub Title	
Author	鈴木, 智之(Suzuki, Tomoyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1997
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.2 (1997.) ,p.1- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 I : 社会学の方法とリアリティ
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19970000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集Ⅰ「社会学の方法とリアリティ」に寄せて

特集Ⅰ編集担当 鈴木 智之

考察の対象となる社会の現実には肉薄し、できる限りリアルな記述や分析を提示すること、それがおよそすべての社会科学に共通の課題であることは言うまでもない。しかし、社会学には、隣接する諸科学との比較において、「リアリティをすくいあげよ」という要請がとりわけ強く働きかけている。例えば、経済学や法律学が要請するような体系的な構築性や操作的な形式性を犠牲にしても、社会学者は、目の前の現実には密着しその微妙な推移をとらえるために、即興的な概念を生みだしたり、その場に依じた分析枠組みを案出したりする。あるいは、時代と併走し現代を読みとくことを自らに任じ、それゆえに、自説の妥当性が十分に検証されえない場合においても、その場での説得力を頼みに断片的な仮説をふりまいていく。そのために、社会学の言説にはしばしばルーズさがつきまとい、ともすれば学問・科学としていかがわしい印象を与える。少なくとも、社会学が安定したパラダイムを持たず、たえず方法論の更新を繰り返している理由の一端はそこにあると言えるだろう。

しかし、社会学もまた制度化された科学として成立している以上、論理的な形式性を備え、標準化された方法論を整備しなければならない。「科学」とは何であるのかという問いにどのような答えを与えるにせよ、社会学が文学やジャーナリズムとは異質な領域に属していることは否定できない。科学という制度の中で正統性を主張しようとする言説であること。これが社会学に課せられるもうひとつの要求である。

この二つの要求が同時に満たされることが最善であることは言うまでもない。しかし、往々にして、理論的な体系性を求め、標準化された方法論の中で現実を語ることは、リアリティをとらえようとする欲望との間に齟齬をきたす。

例えば、フィールドワークをする社会学者は、現場で感じ取る圧倒的な現実感と、それをすくい上げる学問的方法の貧しさにしばしば絶望的な思いをいだくことであろう。あるいは、時代の先端で絶えず移ろっていくリアリティの変容の速度に記述言語や分析装置が追いつかないことへのいらだちも多く、社会学者にはおなじみの経験ではないかと思う。さらには、調査対象者の主観的な生活経験を、学問的な視点から対象化し、研究者の言語で記述するということがそもそも現実の歪曲に他ならないのだという感覚も、多くの社会学者が抱いているはずだ。

学としての形式性の尊重と目の前のリアリティの把握。社会学者はこの二重の要請の間で揺れ動く。だからこそ、理論を刷新し、方法論を鍛え上げ、少しでも現実に密着した記述と分析を試みようとする。しかしそれでも、二つの課題の間には隙間は容易にはふさがれない。

では、この二つの要求の緊張関係を前にして、社会学者はいかなる態度をとり、どのような認識論的枠組みや方法論を整備することを求められているのか。これが、今回「社会学の方法とリアリティ」として提起されるテーマである。

このテーマは、前回の特集に対して提示された問題を、ひとつの方向へ継承する意図のもとに設定されている。前号（創刊号）において、『三田社会学』は、「社会学は今何をなすべきか」という問いを投げかけた。この大きな広がりをもつ問いかけには、もちろんのこと様々な視点から回答が寄せられ、さらに検討されるべきいくつかの課題が示された。その中で、ひとつの興味深い論点を提示したのが、社会学の制度化と大衆化のあり方をめぐる藤田弘夫氏と吉原直樹氏の発言であった。

藤田氏は、学説と調査技法だけを習得し、社会の現実にあまりも無知な社会学者の集団が、学会として制度化され、「町内会」化している現状を指摘する。その社会学会という名の「談合的世界」においては、研究者たちが無知なるがゆえに「発見」や「業績」と評価されてしまうような「研究成果」が累積され、かつ「社会の最新のできごとに着目している」ことを口実として未成熟な研究が許容されてしまう。社会学という名称が、未熟な素人芸に制度的な承認を与えていると言えよだろうか。藤田氏は、この安易な制度化のありようを打破するために、「隣接諸科学の成果を踏まえた、該博な知識」を身につけ、その上で、「『現代』という万能薬を使わなくても議論を展開できる理論を彫琢する研究」、あるいは「現実を鋭くえぐり出す調査にもとづく研究」を生み出さねばならないと主張する。

他方、吉原氏は、デュルケームやウェーバーといった「社会学者」たちの名前が「無名化」し、「『ものわりのいい社会学者』を演じたがるパフォーマンス」ばかりが跋扈する現状を指摘した上で、その背後に「社会学の危機」を見通す。すなわち、時流に乗った「ある種の社会学」が商品価値を生み出している一方で、「ものごとの底にかくれている意味をドラマチックに構成しようとする制作意欲」が欠落し、「社会学的想像力がすっかり現実に追い抜かれ」、社会の現実に拮抗しうるだけの論理体系を樹立しようとする姿勢さえもがどこか滑稽なものに化してしまう現実が見える、というのである。

前号の編集にあたった永田えり子が整理するように、両者の認識は、一方が象牙の塔にこもることをやめもっと現実に通用する議論を展開すべきだと言い、他方が古典に立ち返り学問としての正統性を追求すべきであると主張している点において、「一見・・・まっこうから対立する位置にある」。しかし、両氏の発言の背後には、相当程度にまで共通する現状認識があるだろう。それは、社会学者が真に現実的な要請に応えるだけの理論的・方法論的な装備をもたないまま、小器用で未成熟な現実講釈に明け暮れており、しかもそれを内輪の世界の相互承認によって正統化してしまっている現状への危機感、と言えよだろうか。

では、その現状を乗り越え、学問としての成熟をはかりながら、同時にリアリティを正確につかみとるような社会学を作り上げていくために、私たちは具体的に何をどう考え、何を試みていけばよいのだろうか。私（鈴木）個人としては、社会学がどれほど精緻な理論を構築したとしても、それが現実をリアルに映し出すものでなければそこには何の魅力もないと感じている。リアリティに執着する学であることが社会学のアイデンティティであるとさえ思う。しかし、言うまでもなく、リアルな言説であるということは、目先の現象にものわりのよい解釈をほどこすことでは決してないし、いたずらに調査対象者の視点に立てばそれでよいというものでもない。むしろ、学問的であるがゆえに提起することのできる現実の位相、その深み、あるいはその見通しがありうるはずである。そこに求められる「社会的なリアリティ」とは何か、そしていかなる方法論をもってその対象にアプローチしていけばよいのか。これが今回ここに提示される問いである。

もちろん、この問題に対する答えは、それぞれ研究者の研究対象やフィールドによっても、あるいは理論的立場や実践的立場によっても異なって来るだろう。また、個々の研究のスタイルによって、問題の受け止め方そのものがかなり拡散することになるのはやむをえない。今回は、議論を一点に集約させるというよりは、その射程の広がりを示すことを意図して、立場やスタイルを異にする四人の研究者に寄稿をお願いした。ここであらかじめ、四氏の問題の受け止め方とその基本的な論点を要約し、相互の連関性を確認しておくことにしよう。

有末論文は、前号の議論を直接にひきつぐ形で社会学の「制度化の功罪」を問うている。一方で、学問の「自立性」の概念があやふやになり、社会学者もまた「視聴率競争」に巻き込まれていくという大衆消費社会的な傾向が見いだされながら、他方では、生活を保障する制度的場の中で誰にも読まれない「研究論文の堆積」が進行していく。制度化は「形骸化」の危機をもたらすものの、制度を拒絶したリアリティ感覚も「現代社会の表層記述」に墮するしかない。しかし、そのジレンマを抜け出すための明確な処方箋を描きうるわけではない。私たちは「問い」を抱きかかえたままフィールドへと向かい、「迷走」を続けていくしかないのだと有末氏は結んでいる。

では、実際のフィールドワークに即してみたとき、問題はどのように見えてくるのか。大矢根論文は、災害社会学における被災地調査の経験にもとづいてこの問題に具体的な輪郭を与えてくれる。大矢根氏は、災害研究が被災直後のカタストロフィックな局面に限定されるのではなく、継続的な実証の上に「被災者（地）の独自のロジック」の解明に向かわねばならないと主張する。その上で、その独自のロジックを読み解くことの難しさは、調査技法の成熟度によるのではなく、「調査者の被災地（インフォーマント）に対する愛情と責任感」、すなわち対象に挑む社会学者の態度の取り方によって決まるところが大きいのだと言う。若手（？）の研究者が被災地に足を踏み入れながらも、そのフィールドにコミットしきれない状況を見て、大矢根氏は「調査者として対象に主体的に関わり続けて

みようというバイタリティが低下している」のではないかと慨嘆する。そして、研究者が「自らの位置づけに思い悩むという状況」を乗り越え、それぞれの視点や方法論を鍛え上げていくことが可能となるような、専門研究領域としての体制づくりの必要性を訴える。制度化された環境の整備こそが現実に対峙しうる研究者としてのモラルを支えるのだ、と言い換えてよいだろう。言うまでもなく、ここに指摘される問題は災害社会学に固有のものではない。次々と新たな研究対象が「発見」され、新しい研究領域が生成していくのは社会学の常であるが、それぞれが個別の領域として成熟していくためにどのような環境の整備が必要であるのか。これを技術的な問題に還元せず、研究者のモラルの育成あるいは姿勢のとり方とからめて論じていくことが必要であるのかもしれない。

前二者の議論が、制度のあり方とその中でのフィールドワークのあり方を問うものであったのに対し、浦野論文と吉田論文は社会学が対象とするリアリティとは何か、あるいは社会学的な認識はその現実に対してどのような位置に立つのかという問題に焦点を置いている。

浦野氏は、エスノメソドロジの観点から、認識の対象となる現実を相互行為秩序へと限定し、その記述の方法を、とりわけ相互行為に外在する諸要因との関係において主題化する。それによれば、相互行為の過程においては、その場面に内在するレリヴァンスにもとづいて外部の事実が参照されるのであるから、相互行為秩序の記述はあくまでもそのレリヴァンスに忠実な形でなされるべきであり、「場面に対して物理的時空間上および因果論上の外部にある事柄の影響を考慮する必要はない」のだと主張される。確かに、研究者視点から持ち込まれた現実解釈の図式は、生起した相互行為の場面に関与しない事象を恣意的に結びつけ、いわばありもしない現実をでっちあげる可能性を含んでいる。相互行為のレリヴァンスに忠実であれ、という主張は研究者視点からの現実構成に対する根本的な次元での批判であると言えるだろう。しかし、そうであればこそ、相互行為の中で有意なものとして指示された事柄だけが現実であるという考え方に立つべきかどうか、議論の余地が残されているはずである。

これに対し、吉田論文は、プログラム科学の観点から社会学的な認識の全体的な見取り図を描きだそうとしている。まず一方では、社会学的研究の対象が「事実的秩序と三層の情動的秩序（貯蔵水準のコード、貯蔵水準のメッセージおよびプログラム、作業水準のメッセージ・プログラム・コード）との相互循環」として定位される。すなわち、現象として生起し、認知される秩序（事実的秩序）は、それとは区別される記号集合の秩序（情動的秩序）と外部要因（状況要因）とに媒介されて産出されるものであり、二層の秩序の相互循環過程の総体が社会学的リアリティとして対象化されねばならないのである。他方では、対象として提示されたリアリティと研究者の営為との関係が、「狭義の生活世界」と「社会学的世界」との相互循環として描き出される。その際、研究者による社会的世界へのアプローチの方法には、「当事者言語」を用いるか「研究者言語」を用いるか、「当事者視

野」に立つか「研究者視野」に立つかという二つの選択軸があり、その二軸の組み合わせによって四つのタイプまたはフェイズに分類される。吉田氏によれば、この四つのスタイルは、相互に対立し合うべきものではなく、「社会学的情報空間の相互に密接不可分な、相互補完的領域」として理解されねばならない。（あえて浦野論文との対比をするならば、研究の対象と方法に関する二つの包括的な図式化には、その対象とアプローチの方法を特定の世界とスタイルの中に限定しようとするエスノメソドロジーなどへの批判的意図を読み取ることができる。）いずれにせよ、当事者によって生きられる日常的情報空間（狭義の生活世界）は科学的情報空間と相互に浸透しあって「広義の生活世界」を形作っている。社会学は、実証科学として、あるいは設計科学として、二つの世界の橋渡しをはかり、広義の生活世界の充実につとめなければならない。そのプロセスにこそ、吉田氏にとっての社会的なリアリティが見出されるのである。

この見事な体系化の作業に教えられるところは大きい。ことに、特定のリアリティを対象を限定し、アプローチの幅を狭めていくことで自己の方法論を見出そうとする研究者にとっては、自らの位置がこれだけの俯瞰図の中に描かれてしまうこと自体がひとつの挑発であり、（抵抗や反論の可能性も含めて）自分の研究の姿勢を問い直す契機となるように思う。

「社会学の方法とリアリティ」というテーマに対して、執筆者の方々が力のこもった、個性的な論考をよせてくださったことにまずは感謝の言葉を述べたい。編集担当者の率直な思いとしては、意図した以上に、問題の射程の広さ、その奥行きを教えられることになった、と感じている。と同時に、まだ論点が出揃ったわけではない、とも思う。ひとまずは、四氏の論考が何らかの形でさらなる論争の呼び水となることを願いつつ、議論の継続をはかることが私たちの役割であることを確認しておきたい。

（すずき ともゆき 法政大学社会学部）